

「心の四季」歌うにあたって その5

2. 「みずすまし」

高田三郎の典型的作曲スタイルは“弱起”を多用することにある。

“弱起”とはそもそも小節の拍の途中から始める手法により、語頭の衝撃を軽減する場合に特に効果を発揮するので、the や des などの冠詞から始まるような欧米の文法に適しているが、冠詞のない日本語には馴染まないと考えられていた。それを逆手に取ったのが高田三郎である。語頭にアクセントが来る日本語を柔らかく着地させて次の言葉へと繋ぐ手法に“弱起”を当てはめたことでより滑らかな歌唱が生まれたのである。

さて「みずすまし」の最初を見てみよう。2小節のピアノの前奏のあと1拍目から歌詞が始まる。これはむしろ“強”起であり、完全に高田スタイルが封印されたことになるが、ここで作曲者は自らの手法を再度逆手に取ったことになる。つまり“弱起”ではない予想外の開始でちょっとした緊張を生み、併せて全パートユニゾンにすることでそこに完全な表面張力を創った。まさに『一滴の水銀』を音楽空間に存在させたのである。

その後は高田三郎のセオリー通り“弱起”が続き、クライマックスの『何と読むのか?』までストーリーを繋いでいく。

『生きる力をさりげなく水の中から持ち帰る、つぶらな可憐なみずすまし』が暗示するものの答えを見つけられず『わたしたち』は分厚い日常にもぐることもできない。しかしその優しさの答えが分かるのは、きっと…。

3. 「流れ」

第6曲「雪の日に」と同様に8分の12拍子、つまり1小節に8分音符が12入る回転する4拍子と捉えることができる。

「流れ」には、急流が遡る魚を孕みながらも岩と激しくぶつかりながら一途に川下へ向かっていく爽快感がある。そしてこの8分の12拍子が符点音符のような尖った感じを与えることなく、激しさや重さを飲み込んでスムーズに進んでいく効果をもたらしている。題の「流れ」はここでは主役でなく、主役はむしろ「岩」や「魚」であったり、「卑屈なものたち」である。それらを押し流そうとする自然の圧力は人生の厳しさと優しさと摂理を私達に教えてくれるのである。

↓続く

4. 「山が」

高田三郎はこの曲が野外で（無伴奏で）歌われることを巻末の「演奏上の注意」で推奨している。今は山に登って『ヤッホー』なんて叫ぶ人は少なくなったけれども『ヤッホー』がこだまする様がコーダのハミングで歌われていく。

人の心を虜にする山の神聖な空気を感じさせるこの組曲の第4曲目、つまり中間で私達にほっと一息付かせてくれる不思議な曲である。

5. 「愛そして風」

愛の疾風が揺れ、ざわめいている様が曲を通して綴られている。

中盤で枯葦が風に吹かれてそよぎ、静まるシーンが短調で無機質に据えられているが、これはその前後にある『ひとは』『ひとだけが』愛が遠のいたあともその思い出にざわめき、歌いやめないとする熱い想いに相対している。

題目の「愛そして風」はなぜ「愛の疾風（かぜ）」ではないのか。…そもそも愛の疾風は愛そのものであり、疾風は中盤の風とは違う。ひとをざわめかせるのが愛（の疾風）であり、風は枯葦を揺らすのみであるが枯葦にはそれで良いのである。

私達は、ずっと歌う葦でいたいものだ…。

T.Ozaki
2017/05/23

最終回はこの組曲のクライマックスともいえる「雪の日に」と終曲です。